草鞋の中の小石

『石見の昔話』より』語り手・斎藤多作(三隅町向野田

朗読用に潤色・洲浜昌三

二人はまことに夫婦の仲が睦まじくて、毎日毎日おもしろいことばか昔、あるところにねえ、お爺さんとお婆さんがおりました。

ある日、お婆さんが、お爺さんに向かっていいました。

りを話して暮らしておりました。

「お爺さん、おまえは わしのような不細工なものを、どが思うて連

ろうとってくださったか」

「わしはのう、おまえを恋し恋しと思うて連ろうておった」

「ああ、そうかな。ただそれだけかな」

「そがいうなら、もう一つあることよ。草鞋の中の小石だ思うて連ろ

うておった」

「そうかな。そいじゃが、草鞋の中の小石たぁどういうことかな」

「そうよのう・・・歩けば痛い・・・いつ出そうか、いつ出そうか思

うて、いままで連ろうておったんじゃ」

と言いましたそうじゃ。

(20230805潤色・話の趣旨を更に生かし、語りとしての特徴や魅力を活

かすために、原文を少し潤色しました。洲浜昌三)

鼻なおし

「石見の昔話」坂井董 美編 (日本放送協会発行)

語り手・渡辺休二郎(富山町富山

朗読用に潤色・洲浜昌三

昔むかし、あるところに、ちょうど、あんたたちみたいに、かわい

ったのです。 げな女の子がおりました。ところが、可哀想そうなことに、鼻が低か

うて、い つも心配しておりました。 それでそのお母さんが、何とかして鼻を高にしてやらいいな、と思

ある日のこと、鼻なおしがやって来ました。

4

(

「鼻なおしい、鼻なおしい」

ちょうどかどを通ったで、こら、ええことだなあと思て、

らわれせんかな」 「鼻なおしさん、この子は鼻が低うてやれんで、なんかでなおいても

「さああ、なんでなおしましょうかな。ここにちょうど飴がああけん、

飴でなおいちょきましょう」。

そうで、飴でなおいてもろうたら、 甘いもんだけん、やっぱり、

こう、舌を出いて、こうやって鼻をなめて、あんまりなめて、とうと

うまた鼻がなあなって、こら困ったことだなあと思っちょったら、二、

三日して、また、鼻なおしさんが通りかかりました。

この子がなめて、鼻がのうなったで、そうで、またなめんやなもんで 「鼻なおしさん、鼻なおしさん。飴でなおいてもろうたら、とうとう

「さああ、なんでなおしましょうかな。ここにロウソクがああで、ロ

なおいてもらわれせんかな」

ウソクでなおいちょきましょう」。

子どもが着物の袖で、ちょっと こうなぜる。右へなぜると右のほう また鼻がのうなってしもうた。 へ鼻が傾く、また左いなぜえと左へ傾く。そうでとうとう傾い て、 かあ、ロウソクで鼻をなおいてもろうたら、今度は鼻が出えと、

のうなあけん、で、あがんことすうじゃないで。 なめたり、へから、着物の袖でさぁっとこう鼻ふいたりすうと、鼻が そればっかり。 そうでおまえたちも、あがぁに鼻が出たときになあ、舌出いてこう

(

)

兵児かかや

(省略)

20230805潤色・若干潤色しました